

「受験国語」に思うこと

福岡 誠也

現在私が勤務する高校は、久留米藩校として設立されて以来二百年の伝統校である。御多分にもれず進学校であり、普通科からは地元の九州大学に七十人前後が進学するのを筆頭に国立大学に毎年二百人以上の合格者を出すなど進学率はほぼ百パーセントである。(本年度の早大合格者は十九名であった。)

学校の所在地は福岡県の第三都市久留米市である。ところどころには大手予備校が一つもない。福岡市には河合も代ゼミも駿台も、そして通称「親不幸通り」には地元大手の予備校が二校あるのだが、幸か不幸かここにあるのは、むしろ高校受験を中心とするような小さな予備校だけである。

したがって、予備校・塾に通う生徒は少数であり、「学校」があらゆる受験対策の中心となっているのが現状である。早朝・放課後・長期休暇中の課外授業。(福岡県ではほとんど全ての公立進学校が実施している。)予備校から講師を招いての講演会。夏休みにホテルを借り切ったの勉強合宿。(九州の進学校で大流行している。)正月の元旦模試。果ては入試出陣式に至るまで、およそ都会では予備校がやりそうなことはすべて学校で実施している。よって授業は必然的に受験対策に終始することになる。

「出るか、出ないか」極論すると、これが全てを支配する原理である。

「古今と新古今少し削らんね? 歌だけするとはしえからしかよ。だいたい出らんばい」教材の選定もこの調子で進められる。「徒然がすんだらんばいしょうかね?」「奥の細道全部せんね? この頃近世出とるばい」入試傾向に教材は左右される。ちなみに四年前は「西鶴とばして問題集しようや」だった。

それでも古典はまだ授業と受験が直結しているだけにまだまだである。問題は現代文である。授業が受験にはあまり結びつかないのである。一度授業をした教材を使っている定期考査などだけの暗記テストにすぎず、「定期考査はとれるが実力テストはさっぱり」の生徒がテストの後よく質問する。「先生、現代文上げるにはどうしたらよかとですか?」そのたびに私はあやしげな方法を伝授することになる。

授業する側としても現代文をいかに「点」にむすびつけるか頭の痛いところである。「よし、二年生は『ころ』で現文打ち切って三学期は問題演習!教科書やらやつても点にならん」最後は奥の手を出すことになる。別に私はこの現状を批判しているわけではない。先ほどの会話文は半分は私の発言である。大学受験人口のピークを迎えてそうせざるを得ないのが今の現場である。ただ、私は思う。私を国語教師に導いたのは国語の教科書の中の『万葉集』ではなかったか。唐詩の一節ではなかったか。出版社も入試傾向に敏感である。上代文学を専攻した私が、教科書の中に『万葉集』を見たのは一度だけである。

(福岡県立明善高等学校)

池田光陽

高等学校の教科指導に関していつも考えさせられるのは、六月の「教育実習」が始まる前後、授業の進め方について実習生と打ち合わせをする時である。「教え方」の研究では高等学校は小中学校に比べてはるかに遅れていると思う。古典教材の研究書などが多いのだが、授業の技術（発問・板書・ノートのとり方・話し方・授業の進め方等）については小中学校の先生方に学ぶところが多い。今年度は、小生、普通科三年の「現代文」と「選択古典」、家政科三年の「選択現代文」を受け持っていたので、実習生には普通科の「現代文」と家政科の「選択現代文」の授業を持ってもらうことにした。

教科書は大修館の「高等学校現代文」（普通科用）と「高等学校新現代文」（家政科用）とを使用。生徒の学力は普通科と家政科とでは開きがあるのだが、教材はなるべく同じものに取り組ませている。一学期は夏目漱石の『現代日本の開化』を扱った後、近代文学史の流れをまとめることから始めた。そして、教育実習では「新現代文」の中にある森鷗外の『高瀬舟』を扱うことにした。その後の授業で『舞姫』に入る。実習生には三月から教材研究にとりかかってもらった。丁寧な授業だったの

で、進度は予定より当然遅れた。また、普通科の授業はやり易かったようであるが、家政科では思うように行かず、戸惑ったようである。そこで、ノート作り・語句調べ・簡単な設問のプリント配布等、作業をとり入れることで何とか切り抜けてもらった。専任の教師でさえ、町田高校では、全日制の普通科・家政科、定時制普通科、留学生の日本語と、目的も学力も異なる様々な種類の生徒を相手に四苦八苦するのだから、実習生が苦しむのも無理はないと思う。

国語の場合、生徒の持っている語彙数の違いが授業に大きく影響してくる。著しい例は留学生の日本語学習である。語彙数の増加と共に、文章を読む理解力が格段に深まってくる。これは、普通科・家政科・定時制の生徒にも当てはまる。その発展教材として、新聞の社説やコラムで授業に関係のある部分を切り抜いて教材に生かしたりしている。今回の実習では、実習生が「知足」の問題と「安楽死」の問題を中心に取り上げていたので、教育実習後、「安楽死」に関する新聞の社説や特集欄を切り抜いて、プリント配布した後、個々の感想を述べてもらい、その上で賛成・反対に分かれて討論を行ってもらった。結論は出なかったが、十代の生徒が普段考えもしなかった「人の死」について考えさせるよい機会となった。授業が上手く行くことはあまりないのだが、何か一つ感動や生徒に考えさせることへの投げかけができればと思っ、生徒と共に学んでいる。

（東京都立町田高等学校）